

竹内 はるか 提出 学位申請論文（課程博士）

『三重県北中部方言におけるアクセントの研究』 審査要旨

### 論文の内容の要旨

本論文は7章からなる。序論では、本論文の研究目的と用いた記号、術語の説明、研究方法について述べる。本研究の目的は、東西方言の境界地帯における方言アクセントについてその実態と変化の動態を明らかにすることである。方法としては特色のある三重県北中部方言に着目し、一地域方言のアクセント体系を各年層・複数の話者ごとに記述した。当該方言は、服部四郎（1930）では80年前には典型的な京阪式アクセント体系であったが、式の保存や型の変化とその異音の幅、個人差を検討した結果、従来の研究報告と異なり、当該方言におけるアクセント体系変化の傾向と速度が幅広い年層にわたって過渡的様相を保ちつつも、近年になって東京式アクセントへ急激に変化する様相を明らかにした。

第1章で、先行研究の議論を整理し、三重県鈴鹿市アクセントの方言の位置づけと問題のありかを明らかにした。また当該方言は、位置的に東西両文化圏と結びつきがあり、古くから東西交通の要衝であるという文化的な背景があった。

第2章では、臨地調査の結果から、三重県鈴鹿市方言のアクセントは、個人差、アクセントの型、所属語彙の異動が大きいのが、式の対立という観点から分類し、三つのタイプに分類した。①伝統的な京阪式の体系を

保持する伝統タイプ、②その中間的な様相を示す混合タイプ、③東京アクセントの体系に近いニュータイプである。

各タイプについてアクセントの音声的相を明らかにして体系と音韻論的解釈を示した。

①伝統タイプの特徴は、1拍名詞に助詞が付いた場合も長呼化すること、全てのアクセント節で京阪式アクセントの特徴である高起式、低起式の対立を保持している点にある。所属語彙と型の相も京都アクセントとほぼ同様である。このタイプは1924年～1963年生まれの話者5名において観察された。

②混合タイプの特徴は、高起式と低起式の対立が曖昧な点にある。このタイプは用言では式の対立が保持されるが、名詞の平板型と、2拍目の後ろに下がり目がくる型では式の対立が曖昧になる。名詞では式による音韻論的対立はない。所属語彙と型の対応は京都式アクセントと東京式アクセントとの相が混在して観察される。この混合タイプは1932年～1993年生まれという幅広い年層の話者23名において観察され、当該方言では最も勢力がある。

③ニュータイプの特徴は、品詞に関わらず高式の対立が消失し東京式アクセント体系に類似する。所属語彙と型の相も東京に類似するが、例外もある。ニュータイプは1985年～1998年生まれの話者9名において観察された。

第3章では、三重県鈴鹿市の用言の活用形のアクセントを記述した。

①伝統タイプでは用言の活用形のアクセントは、式の対立が保たれ、

共通語化の影響が少ない。②混合タイプは、式の対立が保持されており伝統的な相が保たれる。このタイプには、より①に近いタイプとより③に近いタイプがある。用言の方が名詞と比べ古相を保持する傾向があることがわかる。

③ニュータイプでは東京式アクセントと同様の相が観察されるが、伝統タイプにおいて「這入る、参る」は、[○●○] という独自の型に統合する傾向がある。また、形容詞の活用形「～ナル」では①伝統タイプでは [●○○○○] (甘くなる・安くなる) と1類と、2類の対立がない。名古屋アクセントでも1・2類とも [○●●●○] で対立がみられない。しかし、③ニュータイプでは、1類 [○●●●○] (甘くなる)、2類 [○●○○○] (安くなる) と1類、2類で対立し東京アクセントと同じ対立の相が観察される。③の変化の相は、名古屋アクセントではなく東京アクセントへの変化(共通語化)と解釈される。

第4章は、第1節では2拍アクセント節の様々なバリエーションを整理した。①では、2拍名詞は類の統合、型の相ともに京阪式と同様で1/2・3/4/5である。1類が高起式平板型、2・3類が頭高型、4類が低起式平板型、5類が尾高型である。②では、高年層～若年層の幅広い世代で観察され、類の統合は東京と同じ1/2・3/4・5である。ただし、類別語彙の型の相は東京とは異なる。中年層以下では、2・3類に頭高型と尾高型、4・5類にも尾高型と頭高型の語が混在する。4・5類が尾高型に統合するのは京阪式アクセント地域全体で起きている変化であるが、当該地域においてはさらに東京アクセントと同じ相への変化が起きている。しかし、②

の中でも、高年層では4類の尾高型は劣勢で伝統タイプに近く、若年層ではニュータイプよりの東京アクセントと同じ頭高型が観察される。

品詞ごとの変化の実態としては名詞の方が早く変化し、用言は名詞よりも変化の速度が遅い。ニュータイプでは共通語化が進んだ相が観察されることから、当該地域の③では外的変化である共通語化の影響を強く受けていると解釈される。

第2節では3拍のアクセント節の式の対立のバリエーションを考察した。名詞では②混合タイプと、③ニュータイプで式の対立が消失順からみれば、高平型と低起平板型の対立と、●●○と○●○の対立が早く失われる。用言も同様に●●●型と○○●型の対立が早く消失し○●○型に統合する。②では、「小豆」「二人」などは[●●○～○●○]も観察されるが、用言では「歩く」「落ちる」などは[○○●]と必ず第1拍目の低は保たれる。このように、用言においては低起式[○●○]は音声的には第1拍は低でなければならないが、ミニマルペアとして対立する●●○はない。用言では式の対立は音声的相としてはあるが、音韻論的には機能していないと考えられる。

第5章では、三重県北中部における若年層アクセントの地域差を考察した。三重県の若年層アクセントを類の統合・所属語彙の型の対応からみると大きく三つの地域に分類できることを明らかにした。(a) 県の南部に位置する伊勢市・松阪市、(b) 県の北中部に位置する津市・鈴鹿市・四日市市、(c) 県の北部に位置する桑名市である。

(a) の地域では4類型は尾高型に変化している、それ以外の語の所属

語彙と型の相は京都と同じ。

(b) の地域では、4 類型は尾高型に変化している、2・3・4・5 類に尾高型と頭高型が混在する、共通語化の度合いには個人差が観察される。

(c) の地域では、4 類の語は頭高型で観察される、類の統合と所属語彙と型の相ともに東京式アクセントと同じ相が観察される。津市以南の地域では、式の対立を保持する傾向にある。形容詞の活用形では、動詞同様、調査した全域で古相を保持する傾向にあり、拍数が長いほど古相を保つ傾向にある。このように、用言では古相を保つ相が大きく観察される。

第 6 章では、三重県北中部地域の若年層のアクセントの多様性を話者の意識の面から考察した。常に方言アクセントで話すと意識している話者が 3 割以下、相手によって異なるアクセントを使用しているという意識がある話者の割合が 4 割を超える。「先生」には共通語アクセント、「友達」には方言アクセントを話すという使い分けの意識があった。このように日常の言語生活で相手によってアクセントを変えているという自覚がある高校生が多いことが分かった。

終章では第 1 章から第 6 章までの結果をまとめた。先行研究では、共通語化はある世代で急激に起こるか、中間アクセント相が観察されたとしても短期間に共通語化が終了するとされていた。しかし当該地域では 80 代～20 代という幅広い世代で継続的に中間的な特徴をもつアクセント体系が観察された。このような事象から、三重県鈴鹿市方言のアクセント変化は、老年層から若年層に至るまでの幅広い世代で東京アクセ

トの影響を継続的にゆるやかに受け、近年になって急激に共通語化した変化であると解釈される。

### 論文審査の結果の要旨

本論文は東西方言アクセントの境界地帯にあたる三重県鈴鹿市を中心とした方言アクセントの共通語化について考察したものである。三重県北中部鈴鹿市は、北は境界地帯アクセントとして有名な垂井アクセント、北東は東京式アクセントの名古屋に近く、西は京阪式アクセントの京都・大阪に近い。このような東西をつなぐ東海道の要衝の地として常に東西アクセント体系の接触が続き、時代や社会の変化により文化的に優位な側のアクセントが当該方言アクセントに何らかの影響を及ぼしたであろうことは容易に推測できる。

本研究は、東西方言の境界地帯における方言アクセントについてその実態と変化の動態を明らかにすることを目的とし、三重県鈴鹿市方言に集中してそのアクセント体系を各年層・複数の話者ごとに記述した。名詞（単独、助詞付撥音）、動詞、形容詞（活用形）合計 737 項目について、丹念な面接調査により 42 名の話者からデータを収集している。その結果、80 代～20 代という幅広い世代で複数の話者が東西両アクセントの特徴を合わせ持つアクセント体系の話者が多数存在することを発見し報告した。この発見は共通語化によるアクセント変化研究の新しい視点を提案する研究として高く評価できる。

本論文は7章からなる。序論、第1章では、研究目的と研究の意義、論文で用いた記号、術語の説明、研究方法について述べる。

第2章では、式の保存や型の変化とその異音の幅、個人差の観点からデータ分析を行い、個人差やアクセントの型や所属語彙の異動が激しい中で、式の対立という観点から三つのアクセントタイプに分類できることを提案し、各タイプの音声的相と体系と音韻論的解釈と示す。そのタイプは①伝統的な京阪式の体系を保持する「伝統タイプ」、②その中間的な様相を示す「混合タイプ」、③東京アクセントの体系に近い「ニュータイプ」である。

①は、1拍名詞の長呼化、式の対立を保持し、所属語彙と型の相から伝統的京阪式アクセントを保存する。このタイプは高年層で観察される。③は、式の対立が消失し、所属語彙と型の相も東京式アクセント体系に類似する。このタイプは若年層で観察される。②は、式の対立が曖昧で「垂井式アクセント」の特徴を示している。本研究では式の対立の消失過程に着目し変化の様相を記述して次の点を指摘する。即ち、用言には式の対立が保持されるが、名詞では式の対立がないこと、所属語彙と型の対応に京都アクセントと東京アクセントとの相が混在していることである。この混合タイプは高年層から若年層という幅広い年層の23名の話者において観察され、当該方言では最も勢力がある。

このような混合タイプのアクセントが幅広い年層にわたって存在し続けるという現象は希である。本論文では、東西方言の接触による過渡的な混合アクセントの体系が高年層から若年層にかけて持続的に存在する

ことを指摘したことになり、きわめて優れている。このタイプの存在の主張こそが本論文の中核をなす。ただ、そのためには、なおいっそうのデータの質量の拡充が必要である。人数の拡充、助詞の有無による文アクセント、類別語彙だけでなく、漢語や外来語などの語種別、複合語のアクセント規則など幅広いデータの検討が望まれる。

第3章では、用言の活用形の記述で、①伝統タイプ、②混合タイプで式の対立を保つ話者が多いことから、名詞と比べ用言の方が古相を保持する傾向を指摘している。ただし、②の中で①に近いタイプと③に近いタイプがあるとする分類は、混乱を招く恐れがある。明確な基準が提示されることが望ましい。

用言でも動詞と形容詞の振る舞いに差があることが指摘されている点がユニークである。3拍形容詞終止形ではタイプ①・②・③は型の相は違うが対立はない。活用形では、①・②は1類、2類は対立しない。しかし、③ニュータイプでは、「～ナル」では1類と2類が東京アクセントと同じ型で対立することが指摘される。名古屋方言は1類・2類は活用形でも1種類の型に統一されていることから、③ニュータイプの変化は、名古屋アクセントの影響ではなく共通語化と解釈すると主張する。卓見である。東京以外の方言で形容詞のアクセントの実態報告は少なく、今後の詳しい調査が待たれる。

第4章は2拍アクセント節の型の変種を整理し第3章の結論を補強する。全調査語例のアクセントが話者毎に整理されている。今後、このような多彩な変種に自由変異だけではなく何らかの規則性が見つかること



を期待したい。類の統合と所属語のアクセントの型の動きから、①では、伝統的な京都アクセント、②では、類の統合は東京と同じでありながら、類別語彙の型の相が東京とは異なることを指摘する。2・3類に頭高型と尾高型の語が混在し、概ね4.5類に統合する。4・5類が尾高型に統合するのは京阪式アクセント地域全体で起きている自立変化であるが、鈴鹿方言ではさらに頭高型の東京アクセントへの変化が起きている。③では共通語化が進んだ相が観察され共通語の影響を受けていると解釈する。

第2節では3拍のアクセント節の式の対立の変種を考察する。②混合タイプの調査結果から式の消失過程を示す。名詞と用言の式の対立の消失過程を示し、用言の低起式の対立は音声的相にすぎず、音韻論的には機能していないと主張する。これも一つの解釈であるが、音韻論的対立を最小対の有無だけで認めることには些か疑問が残る。最小対がなくても、話者にとって第1拍が「低」でなくてはならないという意識があるなら、音韻論的に低起式を認める解釈の方が話者の言語的直感にあうのではないだろうか。

第5章では、三重県北中部における若年層アクセントの地域差、第6章では、三重県北中部地域の若年層のアクセントの多様性を話者意識の面から考察している。今後さらに調査地域や年代層を広げた調査が望まれる。終章では第1章～第6章の結果をまとめる。

本研究は、三重県鈴鹿市方言アクセントを丹念に調査し、複雑なアクセントの実態を三種のタイプに分けて考察し、幅広い年代にわたる混合タイプの存在を提示する。③混合タイプのあり方は、従来の共通語化プ

ロセスとは異なる。アクセントの共通語化は、「埼玉特殊アクセント」のように急激な都市化等の外的要因に起因し、高年層では伝統的アクセントを保つも、若年層では共通語アクセントに変化し、過渡的相は長く保たれない。しかし当該方言では、幅広い世代で継続的に中間的な特徴をもつアクセントが観察される。三重県鈴鹿市方言のアクセント変化は、京阪式アクセントの自律変化を起こしつつ、老年層から若年層までの世代で東京アクセントの影響をゆるやかに受け続け、近年になって急激に共通語化したとする結論は妥当であり優れている。とりわけ、③混合タイプの提言は本論文のなかでも優れている。惜しむらくは、分類の根拠についてもう少し明確で丁寧な説明がほしかった。また、場面によって京阪式アクセントと東京式アクセントの使い分けが明らかになるとされているが、調査の方法で助詞の種類、助詞無しの文体などのスタイル差やレジスター差についての、さらに社会言語学的調査でも成果が期待される。三重県以外の東西境界地帯のアクセントへの視野も今後の課題であろう。

今後考察を深めるべき点があるが、三重県鈴鹿市方言のアクセント研究を通じて東西境界地帯のアクセントの共通語化過程を考察し、社会言語学的視点も視野に入れたユニークな方言アクセント研究であり、竹内はるか氏の「三重県北中部方言におけるアクセントの研究」は博士（文学）の学位を授けるに相応しい論文と認めるものである。

平成 29 年 12 月 13 日

主査 國學院大學教授 久野 マリ子 ㊟

副査 國學院大學教授 小田 勝 ㊟

副査 國學院大學教授 吉田 永 弘 ㊟

副査 國學院大學教授 諸 星 美智直 ㊟

竹内 はるか 学力確認の結果の要旨

下記4名が各専門分野からそれぞれ学力確認の試験を行った結果、博士（文学）の学位を授与される学力があることを確認した。

平成29年12月13日

学力確認担当者

主査	國學院大學教授	久野マリ子	㊟
副査	國學院大學教授	小田勝	㊟
副査	國學院大學教授	吉田永弘	㊟
副査	國學院大學教授	諸星美智直	㊟